安心・安全な社会の実現に向け 手軽に導入可能なフルＨＤカメラを開発 新ブランド『Ｊupiter』の展開に注目集まるＫＳＭ

『世の中の人が、不安なく暮らせるために』。より安全でより安心な社会の実現に貢献するべく、監視カメラシステムの提供のほか、商品管理システムの開発・販売で着実に実績を積み重ねている㈱KSM。今後もユーザーからの細かなニーズに応えるべく自社ブランドの展開などさらなる開発力の強化に取り組んでいるという。そこで、これからの事業戦略について創業メンバーでもある専務取締役・富園和哉氏に取材した。

専務取締役 富園 和哉氏

グローバルメーカーの公認代理店として多彩な製品を提供

商品管理システムの開発で、小売業者をはじめとした多くのユーザーから高い信頼を獲得。また、総売上370億ドル（約2兆8千億円、2011年9月現在）、従業員数12万人を擁するグローバル企業・ハネウェル社の日本公認代理店として、同社の高性能監視カメラを提供。創業8年ながら着実に成長を続けているのがKSMだ。

ハネウェル社製のカメラを取り扱うことになった経緯について伺うと、「かねてからお付き合いさせて頂いているお客さまのご要望を伺っていたところ、従来の監視カメラに対する不満、改善等の要望が高まっていたことがわかりました。そこで、海外でも高い評価と実績を獲得しているハネウェル社の製品を取り扱うことで、よりお客さまの課題解決を実現できるのでは、と考えたことが端緒となります」

高性能で知られるハネウェル社の製品を取り扱うようになった結果、顧客の複雑な要望にフレキシブルに対応可能となり、さらに精度の高いセキュリティを実現することで高い評価の獲得につながったという。

新たな自社ブランド『Ｊupiter』を展開

同社の事業展開は、ハネウェル社製品の国内マーケットへの投入だけにとどまらない。細かな要望が寄せられた場合には独自にシステム構築を行うなど、個別にソリューションを提供。

また、同社が考える新たな監視カメラの販売戦略として、今後注力したいとしているのがフルHDを用いた超高解像度監視ソリューション『Jupiter』である。

ブランド展開を企図した理由については、急速に進むメガピクセル化の流れが要因であるとしている。

「当社では高画質監視向けの製品開発が手つかずの状態であり、喫緊の課題であったこと。また、今後もネットワーク化や監視の高画質化に対するニーズがさらに高まるだろうとの予測もあり、企画いたしました。会社としても自社オリジナル製品の強化は発展のためには必要不可欠。さらに開発に注力していければと考えています」

さて、いまや小売店舗などで当たり前のように見受けられる監視カメラだが、近年はレジ周りで金銭をめぐるトラブルが多発。1万円札を出したのに5千円札として計算されてしまった、と後からクレームが入るケースも急増している。

後にカメラでレジ周りを確認しても、ベーシックなアナログカメラは40万画素程度であるため、お札を出していることはわかっても、それが1万円なのか千円札なのか種類まで特定するのは困難という問題があった。

「高画質なカメラによる正確な記録により、トラブルを防ぎたいというご要望が年々、強まっているのが実情です。そのニーズにお応えするためにも、積極的にマーケットに投入していきたいと考えています」

アナログ環境でもメガピクセル化を実現する『ＨＤ-ＳＤＩ』シリーズ

KSMの社名を冠した自社ブランドとして積極的にアピールを行うべ

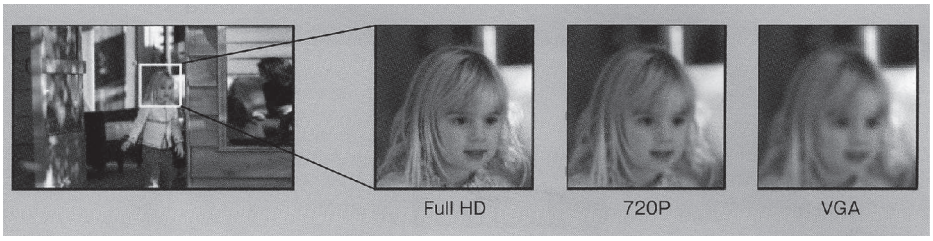
く、『Jupiter』シリーズの本格的なラインナップ展開を行いたいとしている同社。その目玉となるのが『HD-SDI』シリーズである。

「高度な圧縮技術により、既存のアナログケーブルを使用しながら2メガ、3メガ…とネットワークカメラと同等の画像を記録できるところが最大のメリットです。また、高画質の画像をレコーダーに記録することで、レジのお札の種類もしっかりと判別可能なほか、人の顔の特徴まで確認できるのも強みです」

コストを抑えつつセキュリティの質を高めることが可能。ライブモニタリングでも30フレームにより遅延もなく、ストレスを感じることなく監視が行えます。さらにスマートフォンからの遠隔監視も可能なほか、フリーDDNSの利用も可能なためランニングコストもかからず、非常に導入しやすくなっています」

さらに、施工性の高さもポイントの一つだという。

「普通にネットワークカメラを導入する場合、設定が困難であるため機械に詳しくないスタッフの方が担当される場合、スムーズに利用できないという問題がありました。でも、『HD-SDI』であればアナログカメラと基本同じなので、“使い勝手”のよさという意味ではこれまでのネットワークカメラをはるかに凌駕しています。安心してお客さまにお使いいただけるものと自負しております。ただし、一概にHD-SDIばかりが良いわけでは無くネットワークカメラであればこそ出来る事もあり、どちらが優れてるかとは言いがたいですが・・・。」



また、レジ周りに監視カメラを設置する場合、画質の問題からレジにかなり近い距離に設置するケースが多いが、『HD-SDI』であればその必要もなく、来店者に「監視されている」という不快感を与えず、しかも特別な施工を施す必要もない。

ラインナップについても、すでにフルHD(1920×1080)を実現、最低被写体照度0.01Luxと夜間監視にも対応したカラーカメラ『JHBC-100N』、3.5mm～16mmのバリフォーカルを搭載し、三軸構造のため調整も容易なカラードームカメラ『JHDC-200N』、赤外線LED投光により確実な夜間監視を可能にする赤外線ナイトビジョンカメラ『JHLC-300N』、そしてこれまでと同じ遠隔ソフトでの管理が可能なほか、マウスの使用により簡単な操作を実現したHD-SDIデジタルビデオレコーダー『HX-400E』が用意されており、年内にリリース予定との事。

ターゲットとなるマーケットについては、「特にスーパーやコンビニエンスストアなど、前述のようにレジ周りでの適切なお金の管理が求められる小売業者様がメインということになるでしょう。そのほか、金融機関のお客様からもお引き合いを頂いています」

すでに、大阪を中心に全国的にチェーン展開を行っているユーザー様では全店舗で採用されることが決まっている。

「監視機器の入れ替えを行う場合や、セキュリティを強化したいスペースがある場合、店舗の状況などをヒアリングしながら具体的、かつ柔軟にご提案していければと考えています」

世の中の多くの人々の“平和と安全”に貢献したい

ハネウェル社の代理店としての活動と平行して、新たな自社ブランドの展開にも意欲を見せる同社。最後に、今後の販売戦略におけるビジョンについて伺った。

「当社が自社ブランドに注力するもう一つの理由として、よりお客さまの実情にあわせた製品開発を行いたいという思いがあります。高性能な製品をいくつもリリースしている海外の有力なメーカーであっても、なかなか日本市場のニーズや、日本人の特徴に適した製品を開発するのは難しいのが実情です。『世の中の人々が幸せに不安なく暮らすため、最適な機器の開発提案を通して世の中に貢献したい』という当社の創業理念を実現するべく、今後も顧客の利益を最優先に、製品の開発・提案に取り組んでいければと思います」

今後の開発展開にさらなる注目が集まりそうだ。